



4.28^{tue.}
2026 → 8.16^{sun.}

Tuesday, April 28 – Sunday, August 16, 2026

Museum of Contemporary Art Tokyo, Collection Gallery



はじめて、
びじゅつ

MOTコレクション

MOT Collection

Art for Starters

東京都現代美術館
コレクション展示室
主催
東京都現代美術館

東京都現代美術館は、戦後美術を中心とした美術作品およそ6,100点を収蔵しています。

「MOTコレクション」は、これら収蔵作品を公開する展覧会。年に3回ほど展示作品を取り替えて、いろいろな角度からコレクションを紹介しています。

今回は「はじめて、びじゅつ」と題して、美術と関わるさまざまな“はじめて(初めて/始めて)”を切り口に、新収蔵作品をまじえて構成します。「身のまわりから始めてみる?」、「初めて見るってどんなこと?」、「絵のはじまりは?」などの問いかけを通して、美術に触れる糸口をさぐっていきます。

当館を初めて訪れる方も、これまで何度もコレクション展をご覧になっている方も、本展が「びじゅつを(あらためて)はじめる」それぞれのきっかけとなれば幸いです。

最後になりましたが、本展の開催にあたりご協力を賜りました皆様に心より感謝申し上げます。

Foreword

The Museum of Contemporary Art Tokyo is home to around 6,100 predominantly postwar artworks. The MOT Collection exhibitions are designed to showcase these works, and exhibits are refreshed several times a year in order to present as much of the collection as possible, from different angles.

“Art for Starters” features a range of works — including a number of new acquisitions — chosen for their connection to “firsts and beginnings” as these play out in an art context, and explores art in terms of where to begin engaging with it, via inquiries that include starting with the familiar, what it is to see a work of art for the first time, and where painting arise from. For both first-time visitors, and those who have already viewed multiple MOT collection exhibitions, “Art for Starters” offers an opportunity to “start art,” or perhaps, to start it anew.

Inclosing, we would like to express our heartfelt gratitude to all of these who have honored us with their unstinting cooperation in realizing this exhibition.

身のまわりから始めてみる？

歩いているとき、ふと何か気がなって足をとめたり、写真を撮ったりした経験があるでしょうか？たとえば道路脇の金網のフェンスにはまったペットボトルやスーパーボール——だれかが捨てたもの？なぜこんなところに…？

《Fence》は、臼井良平(1983-)の「PET」(Portrait of Encountered Things=日常の中で遭遇したものの肖像)シリーズの一点です。よく見ると、独特な硬質さと透明感を湛えてそこにあるのは、強くも脆いガラス彫刻。街なかに放置されたプラスチック製の容器などが精巧に再現された彫刻を、既存のフェンスと組み合わせ、抽象的な風景として切りだしました。ふだん見過ごしていた私たちの身のまわりにある「もの」やその存在について、改めて考えるよう、うながしているようです。

ここではあわせて、金氏徹平(1978-)が大学1年の時以来、生活の中でみつけた「白」を撮りためた写真シリーズ《white heat》をはじめ、身のまわりに目を向けることから始まった作品などを展示します。

部屋にあるものを見てみたら…？

私たちの部屋にあるものを見ると、その多くがお店などで買った商品であると、気づくかもしれません。1950年代にイギリスやアメリカで登場し、60年代に興隆した「ポップ・アート」の作家たちは、大衆文化を謳歌した日常生活に溢れかえる、広告や漫画、大量生産された商品のイメージなどを(しばしば拡大して)取り込み、作品にしていきました。

トム・ウェッセルマン(1931-2004)の《浴槽コラージュ#2》は、広告写真の切り抜きからとったような入浴する女性のイメージに、タオルやシャワーカーテン、化粧品など実際の日用品が組み合わされた作品です。西洋における伝統的な「水浴」という絵画主題が、大衆消費社会の明るさと空虚さをまとい、目が覚めるような鮮やかな色彩をもって構成されています。

このほか、ロイ・リキテンスタイン(1923-1997)の《ヘア・リボンの少女》や、1960年代初頭ブリティッシュ・ポップの流れを汲みながら、その後、様々なメディアを用いて独自の表現を探究し続けているデイヴィッド・ホックニー(1937-)による室内を描いた版画作品なども、あわせてご紹介します。

どこがはじめてどこがおわり？

はじめとおわりが同じものって何でしょう？または、始めもなければ終わりもないものは？—ここでは、身近な事物や自然から見つけ出した一つの形に注目します。始めと終わりを同じくする「円」です。古来より円は、永遠や、エネルギーの流れ、循環を象徴する形とされてきました。

白川昌生(1948-)の円は、明るくてダイナミック。物事を対立する2つの要素に分けて考える方法に疑問を持ち、それらが対立するのではなく、互いに響き合いながら動き続けるイメージを追求しました。黄色いリングには様々な物が関わり、円を開いていく動きも感じられます。寺内曜子(1954-)の作品は、一つの面を指でたどるとまた元の同じ面に戻ってくる仕組みで、表と裏の区別をなくしてしまいます。ガブリエル・オロスコ(1962-)や白井美穂(1962-)の作品では、身近な物から円環や循環のイメージが形作られます。そこでは、時間は直線的に進まず、川の流れのように、季節のように、循環し続ける。円の形は、そうした世界像を私たちに送り届けます。

初めて見るってどんなこと？

ふだん歩くとき、みなさんはどこを見て歩いているでしょう？ときどきよそ見をするけれど、顔を前にむけて、自分の体の周りも視野に入れながら歩いていませんか？

ここで天井から吊られているのは、彫刻家の伊藤誠(1955-)の作品〈BOAT [ボート]〉です。これらは身に着けて体験することもできる作品で、装着すれば、目の下にちょうど大きな鏡が置かれた状態になります。歩こうとしたときに、目のすぐ下に鏡が広がっていたら？自分の足元は見えず、見えるのは空や天井だけ。いつもと違う見え方に、歩くのが怖く／面白くなるかもしれません。

壁についている作品も、色々な方向から見ることを私たちにうながします。私たちが動けば、最初に見つけた形とはまるで異なる形が現れてくるでしょう。伊藤の作品は、人が物を見る見方やイメージの仕方、作品との関わり方をさまざまに問います。見るたびに異なることが起こり、新しい発見があらわれる。それは何度も「初めて見る」体験ができるということなのです。

“音”に耳をすませてみる？

目をつぶると耳に感覚が集中して、いつもより色々な音が聞こえてきます。それでも、自分には「聞こえていない音」もあるはず。その“音”に耳をすませてみたら…？

八木良太(1980-)の《Lento-Presto (Corridor)》は、大学の廊下に2台の(高音域/低音域)スピーカーを置き、速度を速めた/遅めた2つの音楽を流して撮影した映像作品です。学生たちがにぎやかに行き交う廊下。速度を遅めて/速めて映像を再生すると、どうでしょうか？ふつうの速度(a tempo)では聞こえなかった2つの音楽で、異なる時間の流れが開示され、いつも私たちが認識している世界の外にある領域へと感覚が開かれていくようです。

関根直子(1977-)は鉛筆やシャープペンシルなどによる線で絵を描く作家です。その画面に近づくと、黒光りするような線が様々な長さ、強弱で引かれています。今回はそうした無数の線の集積によって完成した作品を、鉛筆で描いているときの音と共に展示します。制作にまで想像を広げながら、作品を体験してみてください。

戦争のはじまり、平和のはじまり

ここでは、絵画作品をじっくり見てみましょう。大岩オスカル(1965-)の《戦争と平和》を通して、少し異なる角度から「はじまり」を取り上げます。

これまで、戦争に関わって多くの美術作品が生み出されてきました。記録や記念、反戦と平和を訴えるもの、戦死者の追悼など、戦争をさまざまに描いた作品は、異なる背景や役割を担いつつ、広く私たちに世界のあり方や歴史、人の生と死を考えさせます。

《戦争と平和》は、大岩が住んでいた東京の下町が舞台となっています。それまでしばしば環境汚染や温暖化をテーマにしていた作家が、自身の暮らしの底に眠る戦争の歴史を調べ、絵を通してその記憶を引きずり出しました。

壁にかかる2枚の絵を交互に見ているうちに、記憶を描いたはずの暗い画面は、過去ではなく今起きていること、また、未来の光景を描いたようにも見えてきます。戦争は、いつ「始まる」と言えるのでしょうか？「戦争」と「平和」の間には何があるのでしょうか？作家は2枚の絵を重ねて現れる人の横顔を、その間に置きました——その人は何かを考えているところ？それとも眠ってる？

今回のMOTコレクション「はじめて、びじゅつ」は、大岩オスカーさんの絵本『はじめてアート』にちなんで構成されました。

大岩オスカーは日経ブラジル人2世としてサンパウロに生まれました。子供のころから絵が好きで、両親は日本人ですから身の回りにあった日本の漫画も大好き。漫画家の手塚治虫がサンパウロを訪問した際には会いに行き、その時言われた「人のまねをしないように」という言葉を大切に覚えているといいます。サンパウロ大学で建築を学んだ後、日本に渡り、東京の建築事務所で働きながら制作をはじめました。徐々に発表の場を広げ、日本での10年の活動を経て、2002年以降はニューヨークで制作を続けています。

ここでは、ペニヤに鉛筆とアクリル絵具で描いた絵本の原画を中心に、作家が中学生の時に作った《ボトルシップ》や、消しゴムで兵士の姿を切り出した《消しゴム人間》(これは大人になってから作りました)などを紹介します。もしかして、自分にもできそう？ かな？

みなさんは普段、どこで絵を目にしますか？ 美術館の展示だけでなく、店や住居に飾られているものまで、いろいろな所で絵に出会うことができます。さらに注目すると、それらはしばしばフレーム(額縁)に収められていないでしょうか？ 肖像画や風景画、静物画などの作品は、矩形の中にモチーフをどのように収めるかということを考えて構図が作られます。そしてそれらを縁取るために作家が自作もしくはデザインするなど、時代を経るにつれてフレームに対する考え方も多様化しました。デイヴィッド・ホックニー(1937-)のようにフレーム自体を画面に取り込んだり、複数を組み合わせて一つの作品を構成したりする作家や、フレームを用いずキャンバスの側面までを画面と捉える作家、矩形からも離れる作家など、様々です。

ここでは、フレームの中にモチーフをいかに収めるか考え抜かれた構図や、その矩形の外側へと向かっていく発想など、多様なあらわれの作品をご覧ください。

絵のうまれるところ

絵はどこから、どうやってうまれてくるのでしょうか？

この部屋では、画家の中西夏之(1935-2016)の作品を手がかりに探ってみることにします。

中西は、「人は最初どのように絵をかくだろうか」と、常に絵のことを考えてきました。そして、微かな点を付けることから始めていきます。紙やカンヴァスには、まばらな点、上がったたり下ったりする線、ふわふわと浮かぶ線、紫とオレンジが薄く重ねられた面などが現れていきます。それらはまだ名もない、うまれたてのすがたのようです。

やがて中西は長い柄をつけた筆で大きなカンヴァスに向かいます。特別な筆を使うのは、手の届かないところを描いたり、全体の様子を見たりするためだけではありません。あたかも風揚げや魚釣りをするように、長い筆を手に、自分の意志とは別のさまざまな力を感じながら、カンヴァスに近づいたり離れたりして、絵を生じさせようとするのです。イーゼルの前に来たら、そんな画家の気配が感じられるかもしれません。

絵のはじまりは？

画家は、どのように絵を描きはじめるのでしょうか？

つづくこの部屋では、中西夏之の大きな画面の作品を見ていきます。

中西は描く前に多くのメモやドローイングを作っていますが、カンヴァスには下描きがありません。綿密に計画や手順を整えながらも、いざカンヴァスを前に、筆が触れた瞬間の感覚を重視しているからではないでしょうか。「①私は画布の中の微かな『点』を大切にします。②その『点』を二色の粘りのあるペイントの粒で補強する。③その2色のペイントの粒をブラシで×記号を描くようにして混合する。」*点からはじまり、カンヴァス上で絵具が混ざり合うことで、一筆ごとに新たな色やかたちがうまれていく、その新鮮さが即興的に描かれたかのような生き生きとした絵になっていきます。

中西は、緑・白・紫といったごく限られた色彩をもとに、ひとつのカンヴァスではできなかったことを次の画面で試すように、新たな絵をはじめています。揺らぐような緑の線が、密集したり分散したり、大きな広がりになって変化していくさまを追ってみてください。

*中西夏之「テレビジョンのためのノート 1980 XII～1981 I」(編・構成=後藤新治)『中西夏之展』北九州市立美術館、1985年

絵の広がり

墨で描かれた長さ9mにおよぶ絵巻、そして壁に映し出されているのは、固定された1台のカメラによって、この絵巻の筆運びが収められた映像です。左手で開き、軸を転がしながら見ることで時が移ろい、物語が展開していく絵巻物のように、この映像は紙が奥から手前へと引き出されながら筆が走り、水分を含んだ墨が紙に染み込み、線が広がっていく生々しさや時間的な奥行きを感じさせます。石田尚志(1972-)はこの作品について、「『技法によって分類するならば、ドローイングアニメーション』と呼ぶべきであり、3週間にわたって描き連ねられた『ドキュメンタリー』でもある*」と述べています。こうした様々な視点や発想、そして技術の組み合わせが時に、絵画の表現の可能性を拓げ、私たちに新たな気づきをもたらしてくれるのではないのでしょうか。

*石田尚志「『海坂の絵巻』について」『多摩美術大学研究紀要』第22号 2007 p.58

謝辞

本展のためにご出品を賜りました皆様、またご協力を賜りながらお名前を記すことができなかった方々に心より感謝の意を表します。
(敬称略)

大岩オスカル
大西洋
後藤 充

Acknowledgement

We would like to express our sincerest gratitude to all contributors and those who remain anonymous for their cooperation.
(honorifics omitted.)

Oscar OIWA
ONISHI Hiroshi
GOTO Mitsuru

MOTコレクション

はじめて、びじゅつ

2026年4月28日(火)

→8月16日(日)

東京都現代美術館コレクション展示室

主催=東京都、東京都現代美術館

執筆

石川達紘 (pp. 13, 16)

鎮西芳美 (pp. 8, 9, 11, 12)

藤井亜紀 (pp. 14, 15)

水田有子 (pp. 6, 7, 10)

翻訳

パメラ・ミキ・アソシエイツ

デザイン

三木俊一(文京園案室)

編集・発行

東京都現代美術館 ©2026

MOT Collection

Art for Starters

Tuesday, April 28– Sunday, August 16, 2026

Museum of Contemporary Art Tokyo,
Collection Gallery

Organized by Tokyo Metropolitan

Government, Museum of Contemporary Art
Tokyo

Texts by

ISHIKAWA Tatsuhiko (pp. 13, 16)

CHINZEI Yoshimi (pp. 8, 9, 11, 12)

FUJII Aki (pp. 14, 15)

MIZUTA Yuko (pp. 6, 7, 10)

Translated by

Pamela Miki Associates

Designed by

MIKI Shun-ichi (Bunkyo-zuan-shitsu)